

仏像修復の  
主な流れ



1.仏像の形態を手がかりに慎重に解体 2.劣化を防ぐため、木に専用の素材を注入して材質を強化。さらに虫食い穴に充填剤を注入  
3.破損や欠損した部分を制作 4.仏像を組み上げる 5.修復した部分が周囲と馴染むよう彩色

彩色)などを施して仕上げます。  
もう一つ、作業台の上には金や青で彩色された光背が置かれています。これは古河市にある寺の秘仏の一部。12年に一度のご開帳に向けて応急修理をしているところで、クリーニン  
グや剥落止めは青野さんが得意とする作業です。「彩色の塗膜が剥がれた下に膠水(膠を水で薄めたもの)を注入し、上から熱ゴテで押さえます。この熱ゴテは修復するものの形状に合わせて、真鍮を叩いて自作したものです」。後から補足したという部分を間近で見ても、どこに手を加えたのか分からないくらい、きれいに馴染んでいました。

す。表面はきれいでも、塗膜を剥がすと虫食いだらけで木材がスポンジ状になっていることも珍しくないそうです。一方、解体したことによって新発見につながる面白さもあります。仏像の胎内に納められた古文書も、できる限り自分たちで読み解くのだそうです。  
中でも、岐阜県・川崎山薬師寺の観世音菩薩像の修復では、世間の注目を集める発見がありました。「江戸時代の制作と伝わっていましたが、搬入した仏像を見て、平安時代の制作かもしれない」と思い、後補の塗膜をすべて剥がしたところ、やはり直感どおりだったことが判明しました。1本の木を削りだす一木造りの技法は、平安時代の仏像の特徴です。江戸時代の補足が平安時代の造形と合っていないだったので、当初のお姿

に近くなるよう修復しました」と振り返る青野さん。  
この発見は新聞記事となり、各務原市は観世音菩薩像を市重要文化財に指定。それを記念し『修復で目覚めた平安後期の仏像 聖観音菩薩立像』と題して同市で特別公開され、伊谷さんが記念講演をおこないました。  
**地域の宝を守り続けるために**  
仏像修復のやりがい、2人は次のように話します。「お寺で一番大切にしているものを、会ったばかりの私たちが信じて託してください。その勇気に応えなければと思い、数百年という歴史の重みを感じながら作業をしています。仏像をお預りするときには緊張感あふれる面持ちだったご住職さんも、修復が完了して仏像を出迎えるときには、すっかり表

特別な存在です。お寺に代々伝わるものは信仰の対象であり、古美術商では美術品として扱われます。そのため依頼主によって修復の方向性は異なりますが、その中でも揺るがない文化財修復の三原則があると教えてくれました。  
「二つ目が当初優先で、造立当初の部分を守ること。二つ目が尊容の回復で、現状維持にとらわれず破損や欠損した部分を補足すること。三つ目が可逆性で、修復した部分のちに以前の状態に戻せるようにすること。この三つを大切にしています。また、私たちの仕事は修復して終わりではなく、その内容を後世に伝える役割も重要です。そのため、お預かりしたときの状態から、各工程の作業や使った材料など、すべて記録を残しています。それが後世に修復をする際の貴重な手がかりとなります」  
初仕事となった常光院・不動明王立像の「修理報告書」を見せてもらうと、損傷状態や修復内容が写真や図を含めて非常に緻密に記録されていました。台座の裏の銘記が明治期の補修で塗りつぶされたことや、後補(後世の補修)による光背の造形や色が適切ではないことも判明。修復後

は見違えるような姿となっています。  
**修復の工程を見学!**

次に工房を見学しながら主な修復工程について聞きました。工房の中央に横たえられているのは、鎌倉時代に制作された総高約3メートルの巨大な仁王像です。新潟県のお寺から搬入する作業も自分たちでおこないました。解体は伊谷さんが最も気を遣う作業です。「簡単に外れないこともありますし、表面が彩色で覆われていると、どの方向への順番を外せばよいか分かりません。仏像の形状などから手がかりを探り、彩色を傷つけないよう慎重に解体します」。その後、脆くなった木に注射器でメチルセルロースを注入して材質を強化する「含浸」という作業や、虫食い穴に充填剤を注入する作業をおこないます。さらに、歴史知識と彫刻技術を駆使して欠損した部分を補作。元どおりに組み上げて、最後に修復した箇所が周囲と馴染むように古色(古く見せる



平安時代の作と判明した川崎山薬師寺「観世音菩薩像」



見違えるような姿となった常光院「不動明王立像」

今後の目標について、「修復した仏像が、観光につながったり地元への愛着を喚起したりして、社会に役立つことを願っています。もう一つは、文化財の指定解除になって朽ちていくだけの廃寺がある現実を知ってもらい、一人でも多くの方に文化財を守ろうという意識を持っていただけるよう活動していきます」と語ってくれました。  
4月からは、初めて神栖市内にあるお寺の仏像修復を手がけることが決まっています。「私たちの仕事は、古くからあったものを、ずっと先まで残せるようにすること。実際に残していくのは、その仏像を大切に思うお寺や地域の人たちです」という2人。皆さんがこれから仏像に出会うとき、2人の仏像に込めた心に思いを馳せることで、新たな感動を刻む体験となることでしょう。



熱ゴテを使って「光背」を修復



仏像に合わせて色を調合



仏像制作も手がける



伊谷さん青野さん夫妻と子どもたち